

目次

I お参りしてみよう

手水の作法	6
二拝二拍手一拝	8
御本殿	10

II 人生の節目

安産を願って	14
七五三祝祭と成人式	16
結婚から年祝祭	18
厄年	20
葬場祭	22

地鎮祭	24
-----	----

III 四季折々の祭り

除夜から正月	28
鏡餅とお年玉	30
立春から桃の節供	32
春分と端午の節供	34
夏越の祓	36
夏祭りと七夕やお盆	38
仲秋の名月、秋分	40
新嘗祭	42

IV 神道とはどういうものか

神道について	46
--------	----

神道の歴史	48
家庭の祭り	50
奉納について	52

V それぞれの神

氏神	氏族の守護神	56
産土神	生まれた土地の守護神	58
鎮守神	一定区域の土地の守護神	60

あとがき

I お参りしてみよう

手水の作法

神社には必ず鳥居があります。これから先は神域ですから、立ち入らせて頂くという気持ちで鳥居の所で一礼をして参道を進みます。

参道は端を歩きましょう。真ん中は神さまの通られる道なのです。鳥居が離れている場合は、途中のふさわしい場所で一礼をされるといいでしょう。日本人は他人の敷地に入る時には、「お邪魔します」と挨拶します。神さまのおられる清らかな神社に何の挨拶もなく立ち入るのは非礼なことなのです。

お参りするときの心得としては、一般の参拝は夜が明けてから日没までに行います。夜は神さまたちの時間ということですから、むやみに立ち入ってはいいけません。夜は神さまたちの時間ということですから、むやみに立ち入ってはいいけません。また犬を連れてのお参りはしないようにします。犬などは時処をかまわず不浄物を放ち、神聖な境内を汚すからです。現在は空前のペットブームですから、そういうことを言うとお叱りを受けるかもしれませんが、これは古来から

の仕来たりなのです。もちろん境内一円は禁煙です。神社の境内は清浄を第一とするからです。

国旗「日の丸」が掲げられています。神社は、ここが日本だということ強く自覚することが出来る場所なのです。ちなみに寺院には仏旗はありますが、日の丸が掲げられることはありません。それは仏教がインドに起こって、中国、朝鮮を経由して六世紀になって日本に入ってきた信仰だからです。

手水舎てすいしゃが見えてきます。神道では祓はらいということが最も大切ですから、この水で身を清め、形を整えます。汚れを落とすために手を洗うのとは違うのです。

では手水を使います。両手を清めて身を祓はらい、口をすすいで心を祓はらいます。柄杓へしやくには口をつけないようにしましょう。終わると柄杓を伏せて置きます。

手水を済ませ、すがすがしい気持ちで、神前に進みます。



二拝二拍手一拝

参拝の途中では大声の話などは慎みましょう。

灯笼があります。神さまの所を明るくして、神さまをお迎えしようとするためのものです。

狛犬が左右に見えます。狛犬は邪を防ぎ、穢れを除き、神さまを守護する聖なる動物で、宮中の清涼殿に置かれたのが最初のようにです。口を開けているのをア、閉じているのをウンと言ひ、そこから「阿吽の呼吸」という言葉ができました。

神社の前に着きました。この建物は拝殿といひます。

頭上に注連縄が見えます。注連縄は日本神話の「天の岩戸」で知られますが、正月などに各家庭でこれを用いるのは、清浄な場所を示し、悪を防ぐ意味があるのです。

賽銭箱さいせんばこが置いてあります。その昔は願ひ事がかなったときにお礼参りして金銭を捧げたものです。今日では神さまに祈願する時、又は感謝の意を表す意味に重きを置いて捧げています。

鈴すずが下がっています。鈴は、音色の涼しいところから名付けられたものです。これを「私が来ました」という合図のための呼び鈴という方がおられますが、そうではありません。そもそも鈴は神さまの心を和めるものであつて、それにより自身が清まるという神聖なものなのです。ただし、すべての神社に鈴があるというわけではありません。いよいよお参りです。

二拝二拍手一拝の作法で行います。二回深く礼をして、二回拍手をして、一回深く礼をします。礼は正式には九十度、拍手は両手を胸の高さで合わせて右手を少し引き、肩幅まで開いて打ちます。お参りするのに形が必要ということは無いです。感謝の気持ちきもちが深くなれば、自ずから手を合わせて頭も下がるものなのです。



御本殿

神社の横へまわってみましょう。いまお参りしたところを拝殿はいでんといいます。それから少し離れた一番奥の建物を御本殿ごほんでんといいます。ここが神さまの鎮まつておられる場所です。神社によつては建物が一体化している場合もあります。

神さまのことを御祭神みまつりかみといいます。一柱、二柱という数え方をします。その中でも中心になられる神さまがおられます。その方を主祭神とお呼びします。御本殿の扉は普段は閉められたままで、神さまの依代よりしろの御鏡などの御神体が納められています。御神体みかみといつても神さまは物体ではないので、そのお姿は目には見えないのです。

社務所という建物があります。神社のための事務を行ったり、御守りなどの授与所があつたりします。また、神職の住居として使用されることもあります。

神さまに奉仕する神職は装束しょうそくという制服をつけて、ご神前に日本古語の祝詞をあげてお参りします。神職は、神さまへの伝え役ですから、その願いは間違いなく届いているのです。

神職さんのことを神主かみぬしさんと呼んだりしますが、役職で言えば「宮司みやうじ」というのが神社の代表者で、一般の会社でいえば社長にあたります。「禰宜ねぎ」というのが専務とか部長ということになるでしょう。「出仕しゅっし」というのは神職の見習いで、また神職ではありませんが、巫女や受付の女性なども神さまに奉仕する人たちです。

お参りがすむと、すがすがしい気持ちになります。軽く頭を下げて、もときた道を帰ります。鳥居の所まで歩いてきました。ここで立ち止まって振り返り、一礼をして下がります。最初に挨拶して入ったように、こんどは、「失礼します」という気持ちで行う礼儀作法です。